

---

# 第四次聖杯戦異話

満数 駆(みちかず かける)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第四次聖杯戦異話

### 【Nコード】

N2160BA

### 【作者名】

みちかず かける  
満数 駆

### 【あらすじ】

もしも聖杯戦争に本来のサーヴァントではなく、異世界の英雄が召還されたとしたら？というクロスオーバーです。基本的に作者がこんな感じかな？という程度のパワーバランスで構成されていますので、少し原作と違う展開になってしまいかもしれません。そんな感じの短編的な話を進めていますのでよろしく願います。

## 1・キャスター編（前書き）

第四次聖杯戦争で全く違う異世界から彼等が召還されたとしたら？  
というクロスオーバーでお送りして行きます。まだ経験が浅いので、  
皆さまのご意見ご感想をお待ちしております。

## 1・キャスター編

Side ケイネス・エルメロイ・アーチボルト

『ランサー。バーサーカーを掩護してセイバーを殺せ。“令呪をもつて命じる。”』

「主!？」

…まったく、我がサーヴァントながら頭にくる。なぜ態々敵を助ける様なことをするのか。騎士道だの誇りだの、そんなものはサーヴァント“風情”には相応しくない。

港の倉庫街。その一角の屋根に潜み戦局を隠れ見ていたケイネスは、己のサーヴァントに失望を隠せずいた。マスターの透視能力を持つてして視たセイバーのステータスは脅威の一言に尽きる。序盤での破魔の紅薔薇で無効化した風のような宝具に加え真名をアーサー王と、それこそこの場で倒さねばならぬ脅威であることは明白だった。

バーサーカーの乱入には気を害されたが、あの黄金のサーヴァントを軽くないなし今度はセイバーへと疾走した狂犬。これを利用しない手はない。

自身でも気付かぬ程度に焦りを感じていたケイネスは、令呪をもつてランサーにセイバー討伐を命じたことにより更に戦場へと目を向ける。…その背後に、自分以外の影が近寄っていたとも知らずに。

「まったく…ようやくこれで」

ランサーも自分の命令に従うようになる。そう続けようとした唇は、背後から迫る無数の弾丸によって阻まれた。

ヒュン、と風を切る音が26。《50AE弾》 デザートイ  
ーグルなどの大型拳銃によって発射される弾丸がケイネス目掛けて  
飛来する。

その瞬間。それこそケイネスすら知れぬ瞬間ですらケイネスの礼装・  
ヴォールメン・ハイドログラム  
月霊髄液は持ち前の自動防御によって弾丸を防ぐため展開される。

ここで、仮《IF》の話になるが、これが唯の弾丸であれば  
ヴォールメン・ハイドログラム  
月霊髄液は苦も無く26の弾丸を防ぎ切り、それを察知したケイネ  
スも自身を狙う不埒物がいたことに気が付いただろう。そう、唯の  
弾丸であればの話だ。

「がつ！？ぐ、あ…！」

水銀の盾を容易に貫通した弾丸は、ケイネスの急所7か所、その他  
15か所を貫き、ケイネスの命を悉く奪った。

S i d e o u t

「な…、主！ケイネス殿！？」

セイバーへと肉迫するはずだったランサーは、自らの主の魔力供給が途絶えたことを察知し、ケイネスがいる倉庫の屋根を凝視する。このとき、ケイネスに迫っていた弾丸を察知したのはスコープ越しに狙っていたセイバーのマスターと、無数のアサシンだけだった。

「っ！？アイリスフィール！！」

「え？きやつ！」

「む！？坊主っ！！」

「うわぁ！？」

「！！！」

セイバーは自身の直感でアイリスフィールを抱いて、

ライダーは戦車の後ろに座っていたウェイバーを腕で庇い、

バーサーカーは手に持つ鉄のポールを振り回し、

それぞれに迫る、計44発の弾丸からマスターを護った。

唯の弾丸ならサーヴァントの身を傷つけることは敵わない。…しかし、それらの弾丸は薄く紫の魔力を纏いバーサーカーやライダーの腕と背中を確実に傷を負わせていた。

対するセイバーは、アイリスフィールごとその瞬発力を持って全力で避けたため傷はなかった。しかし、その心中は驚愕に染まっていた。否、それはこの場に居た全てのマスターやサーヴァントが共通で感じていた事だ。

この場には千里眼で覗くものや、無数に分裂したアサシン、スコープを使った科学的な視認や使い魔を利用した発見が難しい物も含めそれこそ、無数の眼があつた場所なのだ。

にもかかわらず、“襲撃者が攻撃した瞬間”を、誰も見ていない。これは異常だ。それに弾丸だというのなら、発砲音すらしていない。

「…やっぱり、最初からマスターを狙った方が早いよね」

「っ！？誰だ！！」

背後から聞こえた効き覚えのない女の声に、セイバーはアイリスフィールを庇いながら、剣を向ける。そこに立っていたのは、黒髪の少女。腕には不格好な円形状の盾をつけ、拳銃を手に持っている。…また、気配すらなかった。セイバーが恐れを抱くのと同時にライダーも傷ついた身をそのままに、戦車から身を乗りだし大声で現れた少女に口を開く。

「いきなり攻撃とは、随分な態度だのう…、お主、何者だ？」

それに対し黒髪の少女が返した言葉は一つ。銃をもう一つ何処からともなく出し、セイバーとライダーに照準を合わせる。

「キャスターよ」

## 1・キャスター編（後書き）

キャスター…なにほむなんだ…！？というわけで、第一話でした。  
バーサーカーマジ空気。しばらくはキャスター編で断片的に話を進  
めて行こうと思います。リクエストやご意見・ご感想をお待ちして  
おります。

## 2・キャスター編（前書き）

ちよつと原作を読み返すうちに案が溢れて来たので軽く続きを。短編のつもりで各イベント刻みで話を進めて行くつもりなんですが、大丈夫です…かね？

## 2・キャスター編

Side 遠坂 時臣

遠坂邸の地下室。黄金のサーヴァント・アーチャーのマスターである遠坂時臣は自らの工房で内通している協力者 アサシンのマスター言峰綺礼と魔術を用いた念話をしていた。

内容は、無数に分裂する宝具を持つアサシン“達”による諜報について。これにより、遠坂陣営は表の戦力であるアーチャーだけでなく、裏の戦力としてアサシンを用いて聖杯戦争での情報を集めさせようと画策させていたのだ。

「すまない…綺礼、もう一度言ってくれないか…」

だが、時臣はたった今報告されたこと信じられず聞き返してしまった。『常に余裕をもって優雅たれ』という遠坂家の家訓も、今の時は時臣の心には無かった。

「…はい、私も信じられませんでした…。街中に配置していたアサシン達の消滅を確認しました」

「馬鹿な…」

「…つまり、先にアーチャーによって消滅したアサシン《サイド》も含めて生き残りはこの遠坂邸と教会に残った10体にも満たないのが、現状のアサシンの戦力となります」

時臣は愕然とする。第一段階としてアサシンに情報を探らせるのは、彼にとつて聖杯戦争を勝ち抜くため必須事項だったのだ。最強のサーヴァントと最良の情報網。表裏万全で挑んだはずの聖杯戦争は、皮肉にもわずか一日で激変した。

「私の傍にいたアサシンの情報によると、“突如死角から攻撃”を受け、“ほぼ同時”に数十体ものアサシンが殺られた、このことです。…おそらくは」

「キャスター、か…」

「はい…」

おそらく、という言葉は綺礼は使ったが…ほぼ間違いはないだろう。何故なら七体のサーヴァントは既に出揃い、それぞれの能力とまではいかないが、ある程度の性能は把握できたためだ。

セイバー・ランサー・バーサーカー。宝具によっては不明だが、対人に大きな戦果を残すタイプだろう。

そして、ライダー・アーチャー・アサシン。前者の内2つは自らの陣営の。ライダーは自らをイスカンダルと真名を衆目に晒した。そんな奴が闇討ち染みたことをするとは考えにくい。

つまり、必然的に残るは“問題”のキャスター一人というわけだ。

倉庫街での戦闘。キャスターはマスターの襲撃に失敗すると、

即座に撤退した。ランサーの様子から、どうやら彼のアーチボルト家の当主は敗れたようだ。

だが、それよりも気にかかったのはキャスターの攻撃手段。アサシンの眼を以てしても、どのように攻撃したのかが分からなかった。その件を調べる為、綺礼に調査を依頼した結果が、これだ。

「くっ」

柄にもなく後悔の念が込み上げてくる時臣は、深夜に今後の戦略について、根本的に練り直す必要があると悟った。それが彼にとってどういった未来を招くのか、それはまだ彼にも、そして言峰綺礼にも分かる由も無かった。

Side out

Side キャスター

時を戻すことほんの四半刻。キャスターはビルの屋上にいた。そして足元で光の粒子と消える黒い影を見下ろしながら呟いた。

「これで大体倒したかしら？」

キャスターは自分を追ってきていたアサシンを察知し、彼らを討伐する為、街の中を飛び回っていた。もちろん、他のサーヴァントや

マスター、使い魔などにも“見つからない”ように、だ。

「まあ、ただ追いかけてくるだけなら、“アイツ等”何かよりもマシなんでしょうけど…」

キャスターの脳裏に浮かぶのは自らに戦う運命を科した白い獣だ。しんりゃくじや  
故に、キャスターはそういった輩を倒すには慣れていた。

「…少し、濁ってしまったわね」

キャスターは紫の宝石に目をやり、少し黒ずんだ部分を認めると黒い宝石を取りだした。それを紫の宝石に近付けると、黒ずんだ部分が黒い宝石に吸い込まれて、元の紫の輝きを取り戻した。

それに満足したのか、黒い宝石を仕舞い、街を見渡す。

夜の街。光はまだ消える様子はないが、街にはどこにも暗い場所がある。その暗い場所で、消えて行く命がある。キャスターは自分が召還されたときのことを思い出していた。

キャスターを召喚したのは雨生龍之介という殺人鬼だった。彼が召還の際に用いたのは、襲った一家の血だった。そしてその場にいたのは彼だけではなく、“生贄として用意された”死にかけていた少女だった。

彼は意図してやったことではなかったが、その少女は召喚の際の触媒として発揮された。彼女の願いを。“誰か助けて欲しい”

という願いが触媒として、彼女を召喚せしめた。

結果からいえば、召喚されたキャスターは、龍之介を即座に射殺した。本来ならそれは、あり得ないことだ。何故ならサーヴァントはマスターを失ったなら魔力供給を受けられずに消滅してしまうからだ。しかしキャスターはなんの躊躇もなく、マスターを殺害してしまう。

「……………」

「…『じめんなさい』」

既に息を引き取った少女に謝罪をする。間に合わなかったことを。助けを求めた少女を、救えなかったことを。

「…まどか」

その呟きは、誰も聞くことなく虚空へと溶けた。

## 2・キャスター編（後書き）

おや？今回はなにやら「まどか」や「紫の宝石」など気になるキーワードが出てきましたね。これからどうなるんでしょう。ちなみに作者はアサシンが大好きです（キリッ）  
では次は三話にて。失礼します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2160ba/>

---

第四次聖杯戦異話

2012年1月6日02時50分発行